

# 現代GP「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育」

—平成20年度の活動報告—

Art and Cultural Education through Encounters, Experiments, Discovery and Fusion: Report on Current Good Practice Program in 2008.

- 小松研治、福本まあや、小松裕子、米川覚、沖和宏、近藤潔、渡邊雅志、内藤裕孝、前田一樹、小堀孝之／富山大学芸術文化学部、東田真由美、今城留美／現代GP事務補佐  
KOMATSU Kenji, FUKUMOTO Maaya, KOMATSU Yuko, YONEKAWA Satoru, OKI Kazuhiro, KONDO Kiyoshi, WATANABE Masashi, NAITO Hirotaka, MAEDA Kazuki, KOBORI Yoshiyuki/ The Faculty of Art and Design, University of Toyama, HIGASHIDA Mayumi, IMAKI Rumi/ GP office
- Key Words: Good Practice, Art and Cultural Education, Collaboration, Visualization of Educational Results, Sequential Creative Classes

## 要旨：

本稿では、現代GP「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育」の平成20年度の実施内容について報告する。平成20年度は、本事業の中心的年度としてコラボレーション授業を推進し、成果の具体化・可視化を工夫することで、学生が様々な地域資源に出会い、地域への関心を高め、豊かな発想力を身につける活動へと展開した。具体的には53件のコラボ授業と22件の展示等による成果発表などの成果を上げた。

## 1. 平成20年度現代GP事業の概要

### 1.1 取組の方針

芸術文化学部の現代GP事業「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育」（以下「本事業」と略記）における全体の取組の方針は、地域との多様な連携授業を通して、学部の教育目標<sup>\*1</sup>を達成するとともに、地域の活性化に貢献することである<sup>1)</sup>。

平成20年度は、本事業の中心的な活動年度として位置づけられ、その方針は多様な連携授業、すなわち大学と地域のニーズを結びつけたコラボレーション授業（以下、「コラボ授業」と略記）を実施すると同時に、最終年度の全体的な成果につなげるために教育環境を整備、充実させるというものであった。

この方針のもと、事業推進組織の中核であるコンセント委員会は次の実施項目を定めて活動した。(1) コラボ授業の実施、(2) コラボ授業に関連する情報を広く提供し共有することのできる環境の整備、(3) 授業成果作品の展示や発想を支え、「見る・触れるからの発想」教育方法の実現にむけての環境整備、(4) 地域連携のための環境整備、(5) よりよい教育環境を提供するための調査や交流活動である。本ノートでは、これらの実施項目に沿って、平成20年度の活動実績と明らかになっ

た課題について報告する。

### 1.2 事業推進組織の動き

本事業の推進体制は平成19年度に発足し、平成20年度には各委員会や事務局は定期的な会議や打ち合わせを行った<sup>\*2</sup>（図1参照）。

コンセント委員会は、GP推進代表者を含む教員10名、学務グループ職員1名、GP事務補佐員3名の計14名で構成され、平成20年度には全13回の会議を開催した。本委員会では、運営企画委員会やプロジェクトゼミ

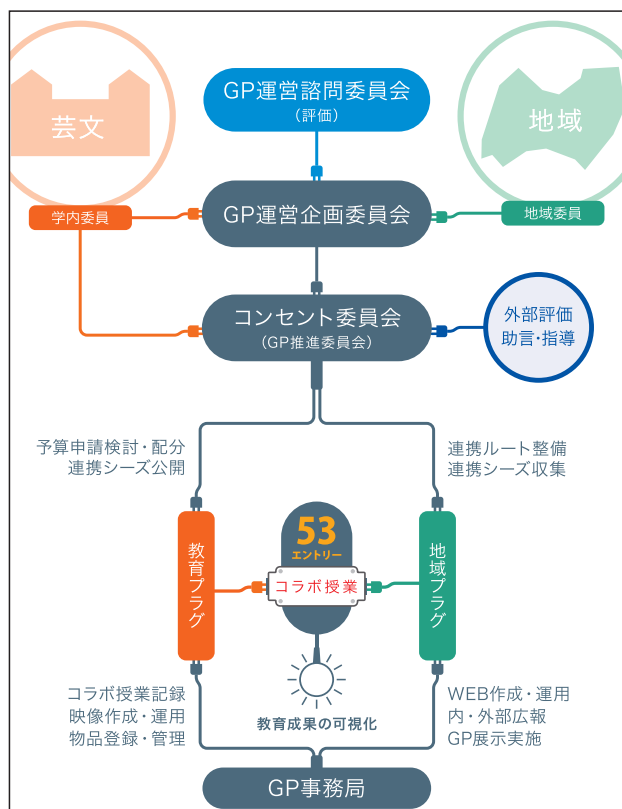


図1. GP推進組織図

(芸術文化学部1年次後期必修科目)に寄せられた連携テーマに加え、本委員会が開拓したテーマを一覧表にして学内教員に配信し、連携可能な授業とのマッチングを図る作業や、連携が成立した授業への支援内容の確定作業、そして成果(学生作品や企画案)の発表の計画立案と実施作業を主に担ってきた。また、連携授業の成果を発表したり、広報活動に利用する際に問題となる知的財産権の取扱いについて、「著作権ガイドライン」として明文化し、その周知を図った。

GP事務局は、前年度に引き続き、本事業の実質的な事務処理を担当し、本事業に関係する情報を一元管理することで、学生・教職員・地域がコミュニケーションをとり、かつ、推進状況が具体的に理解できる拠点として機能した。事務補佐員3名が全体予算の管理、授業支援、記録、広報、情報機器管理などの事務を分担し、教員1名が総括を担当した。特に平成20年度よりコラボ授業が開始されたことにより、授業支援とその記録、及び活動の公開を多様な方法で周知する工夫を行った。

運営企画委員会は、富山県総合デザインセンター副所長、富山市企画調整課参事、高岡市デザイン・工芸センター長、及びコンセント委員会委員3名の6委員で構成し、本事業の説明と連携テーマの発掘に関して検討した。平成20年度の運営企画委員会は3月と9月に開催し、富山市役所各課からは4件の連携テーマを提案していただくなどの成果があった。

8月には運営諮問委員会を開催、富山県知事政策室長、富山市長、高岡市長、及び富山大学学長を含む学内の教員6名が出席した。ここでは、本事業の現況報告を行うとともに、実施中のコラボ授業のモデル例を紹介した。富山市長及び高岡市長より、今後益々若い人の発想力への期待と、学生が地域や街と関わることにより新たな景観が構成される事への期待が寄せられた。また学長からは、地域との関わりの中でどのように新しい連携の芽が出るか、学生達が4年生になったとき新しい芸術文化と

して何が生まれるのか注目していきたい、との期待が寄せられた。

2月には日本教育大学院大学教授 林義樹氏を招き、本事業の経過を報告するとともに、その成果に対する外部評価を受けた。具体的には「関わった教員・職員の変化が認められる」「授業を撮影したビデオを、学生のみならず教員も共有している」という理由により、「FDの視点からも評価することができる」というコメントや、「GPに係る授業の成果物に関する著作権の取扱いをまとめて文書化し、実施している」という点について評価できるというコメントを受けた。また、今後の取組に向けて、新しいタイプの授業へと展開する可能性や、「出会い、試し、気づき、つなぐ」のキーワードに関するアドバイスを受けた。そしてこのキーワードを教員の活動や外部との関わりに広げることで、芸術文化学部の教育理念、さらには、芸術文化教育の特色ある一般理念としても発展させることが可能ではないかという示唆を受けた。

## 2. 平成20年度活動実績と課題

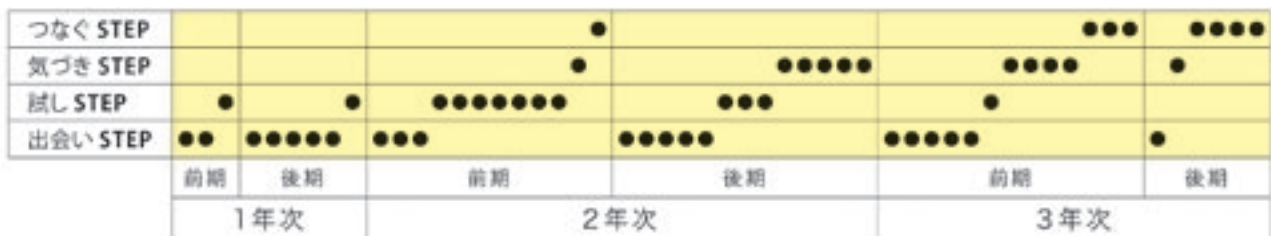
### 2.1 コラボレーション授業の実施

平成20年度は、本事業の「実施年度」と位置づけられ、コラボ授業を中心とした活動を展開した。

準備段階として平成19年度末に、コラボ授業支援の方針を明らかにし、予算ガイドラインを作成、教授会や電子メール等で全教員を対象とした説明会や諸情報の提供を行った。さらにコラボ授業へのエントリーを募り、コンセント委員会による調査書審査を経て、各教員に決定を通知した。決定後の追加エントリー希望については、個別に同様の審査を行い、柔軟に対応した。学生への周知には、新学期オリエンテーション(4月)で説明したほか、常設GPコーナー等で広報を徹底した。

こうした段階を経て、平成20年度には、前期28件、後期25件の計53件のコラボ授業が実施された。またコラボ授業参加学生数は、のべ1,564名、授業担当教員は

表1 平成20年度各コラボ授業の連鎖型成長ステップ・ポジションを学年進行順に並べた分布



※各成長ステップの特性

#### つなぐ STEP

学ぶべき科目の必要性を知り、人・学友・地域文化と出会うステップ

#### 気づき STEP

企画や作品制作を通して、様々な分野の専門性を試すステップ

#### 試し STEP

自己の適性に気づき、将来の道を吟味する機会をつくるステップ

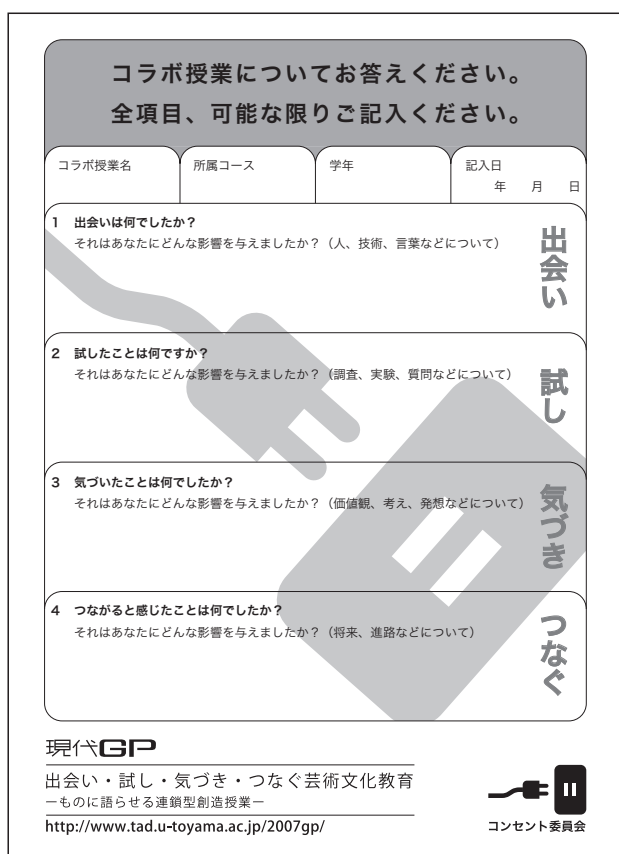
#### 出会い STEP

社会性のある作品・企画づくりを行い、就職活動や進路へと繋げていくステップ

42名（のべ88名）、連携協力講師・講評者数は105（団体は組数で勘定）、学外実習・見学は71件にのぼる。これは、予想を上回る数であり、多様な形で地域と関わり学習する機会を学生に提供することができたと考えられる（文末資料参照）。

一つの授業のなかでも学生たちは、「出会い、試し、気づき、つなぐ」という体験と意識変化を獲得することが期待されるが、各コラボ授業ではこれら4つのステップのどれかに重点を置き、コラボ授業全体が連鎖する成長ステップを目指した。平成20年度はコラボ授業実施の1年目であったということや、新学部のため4年次生を迎えていないこともあり、本事業で提唱する連鎖型成長ステップ「出会い・試し・気づき・つなぐ」においては「出会い」「試し」に重点が置かれる傾向にあった。とはいえ、各段階に相当する授業が、学年進行に沿って順調なステップアップのカーブを描いており、バランスの良い授業分布が成されたことがわかる（表1）。これら授業の記録は別途「20年度コラボ授業記録集」にまとめる予定である。

それぞれの授業の成果は、レポート、パネル、作品などにまとめたほか、個別成果展示（18授業、20箇所）を開催した。また、コンセント委員会が主催し、前期および後期の授業合同の成果展として、学内・学外展をそれぞれ2回ずつ開催した（詳細は2.2）。



コラボ授業についてお答えください。  
全項目、可能な限りご記入ください。

コラボ授業名	所属コース	学年	記入日 年 月 日
1 出会いは何でしたか？ それはあなたにどんな影響を与えましたか？（人、技術、言葉などについて）			
2 試したことは何ですか？ それはあなたにどんな影響を与えましたか？（調査、実験、質問などについて）			
3 気づいたことは何でしたか？ それはあなたにどんな影響を与えましたか？（価値観、考え、発想などについて）			
4 つながると感じたことは何でしたか？ それはあなたにどんな影響を与えましたか？（将来、進路などについて）			

現代GP  
出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育  
—ものに語らせる連鎖型創造授業—  
<http://www.tad.u-toyama.ac.jp/2007gp/>

コンセント委員会

図2 GP アンケート（A5 判）

個々のコラボ授業への支援活動は、各担当教員から提出された授業計画に沿い、情報機器の貸し出しや、必要物品の購入、各担当教員に授業の記録を依頼するとともに、GP事務補佐員が授業風景の撮影や記録を行った。こうして記録された授業内容を、WebサイトやGPにより、学内設置の大型モニターなどを通してタイムリーに情報提供することで、学生のコラボ授業へ理解と履修していない授業への関心を深めやすくすることを目指した。（詳細は2.2）

コラボ授業の成果を測る一つの方法として、GPのキーワード「出会い・試し・気づき・つなぐ」に基づいた学生アンケートを作成し、各コラボ授業において実施した（図2）。アンケートの回収状況は、表2の通りである。アンケートの内容からは、例えば「専門性に繋げて具体的に考えた」、「将来の目標を見つけた」など、「出会い・試し」から「気づき・つなぐ」へとステップアップの様子を窺い知ることができる。

表2 コラボ授業アンケートの回収状況（平成20年度）

対象授業数	アンケート実施授業			
	授業数	履修数	回答数	回収率
53	49	1493	1082	72.5%

## 2.2 情報提供と情報共有

本事業では、「見る・触れるからの発想」教育方法を確立するとともに、地域の活性化に貢献することを目指している。そのために、コラボ授業の成果を学内外において展示・発表する成果展示会を開催するとともに、コラボ授業の経過や本事業の活動全体を多様な媒体によって可視化し、情報の提供と共有に努めた。具体的には、Webサイトでの情報提供、GPだよりの配信、GPニュースレターの発行、学内大型モニターでの放映、ソーシャルネットワークシステム（以下「SNS」と略記）の構築、GP図書リストの作成である。

コラボ授業から生まれた学生作品を展示・発表する成果展示会は、「見る・触れるからの発想」教育方法の実現という点から、本事業において重要な位置づけにある。平成20年度は、授業毎の成果展示会を開催することに加えて、前後学期の各期末に、実施授業（前期28授業、後期25授業）の全てを含めた「コラボ授業成果展」を学内及び学外において行った（表3）。

「コラボ授業成果展」は、一つの展示会に多くのそして多様な授業内容を盛り込むという点で、芸術文化学部では前例のないことであった。そこで、こうした多くの展示内容を来場者に分かりやすく紹介する方法を検討した。その結果、各授業内容を出来るだけシンプルに、かつ可視化されたもので構成することが必要と考え、授業

表3 コラボ授業の成果展示会一覧

	展示会の名称	授業名	会場	開催期日
1	「とやま学生フェスタ」	インタラクティブアート 応用演習	富山市民プラザ	2008年5月23・24日
2	「Eco-FriendlyAction展」	デザインプレゼンテーション	富山大学高岡キャンパス	6月17日～25日
3	「GAINER展」	インタラクティブアート 応用演習	富山大学高岡キャンパス	7月3日～11日
4		コース共同課題	富山大学高岡キャンパス	7月14日～18日
5	「Eco-FriendlyAction展」	デザインプレゼンテーション	高岡駅地下芸文ギャラリー	7月18～29日
6	「前学期コラボ授業成果展」	平成20年度前期コラボ授業	高岡駅地下芸文ギャラリー	8月29日～9月23日
7	「土蔵造りフェスタ」	総合演習	高岡市山町筋一帯	8月30日～31日
8		空間デザインB	氷見市海浜植物園	9月3日～29日
9	「前学期コラボ授業成果展」	平成20年度前期コラボ授業	富山大学高岡キャンパス	9月26日～10月9日
10	「Eco-FriendlyAction展」	デザインプレゼンテーション	富山大学五福キャンパス	10月8日～11月9日
11		シンボルデザイン演習	富山大学高岡キャンパス	11月22日～28日
12		広告デザイン演習	氷見市内3か所	12月末～2009年2月
13	「塑像展」	彫刻実習A	富山大学高岡キャンパス	2009年1月14～2月22日
14	「37の木のおもちゃ展」	木工基礎演習	高岡駅地下芸文ギャラリー	1月16～26日
15	「ペーパーナイフ展」	生形鋳造	富山大学高岡キャンパス	1月19日～2月3日
16	「プロジェクトゼミ授業 成果発表展示会」	プロジェクトゼミ	富山大学高岡キャンパス	1月22～2月3日
17	「後学期コラボ授業成果展」	平成20年度後期コラボ授業	高岡駅地下芸文ギャラリー	2月13日～3月19日
18	「後学期コラボ授業成果展」	平成20年度後期コラボ授業	富山大学高岡キャンパス	3月25日～4月14日
19		環境造形A（塑造）	富山大学高岡キャンパス	4月16～23日
20		コース共同課題	富山大学高岡キャンパス	4月24～30日
21		環境造形C（金属）	富山大学高岡キャンパス	5月13～19日
22	「Gift 11」	クラフト・デザイン	高岡駅地下芸文ギャラリー	5月7～18日



写真2 コラボ授業成果展の展示風景



写真4 学生アンケートのコメント利用の様子



写真3 展示に用いたコラボ授業一覧パネル



写真5 学生が制作した木のおもちゃ作品

ごとに「授業内容」「コラボ実績」「授業成果物」「コラボ授業学生アンケート」を紹介することとした。例えば、外部講師による講演はその動画記録をDVDプレーヤーで公開、実制作作品は優秀作品を選抜し展示、またコラボ授業を象徴する写真をカラーージュするなど、授業のスタイルに応じて展示を工夫した（写真2～5）。

また、後期の展示においては、会場に来場者アンケートを設置し、興味のある授業やその理由など来場者の感想を収集した。これらは今後の取り組みに対する貴重な情報として、さらなる教育改革への取り組みへつなげていきたいと考えている。

情報の提供と共有を目的として、平成19年度末に3台の大型モニターを学内3か所に設置した（写真6）。平成20年度にはこれらの大型モニターで、コラボ授業の記録を編集放映し、履修学生のみならず多くの学生及び教職員が連携先の様子や外部講師の言葉を共有するこ



写真6 学内大型モニター



写真7 GPwebのトップページ

とを目指した。加えて、SNSやGP図書に関する情報を流し、本事業の情報を提供する場として機能させた。この大型モニターの管理体制には、放映データを通信で配信できるシステムを導入し、GP事務局にて一括管理した。そうした中で、徐々に、同モニターの利用を希望する声が聞かれるようになったため、アンケート箱を設置し広く要望を収集するとともに、次年度以降の利用方針をコンセント委員会において検討した。

本事業のWebサイト（GPweb）は、取組の現況を逐次包括的に伝える機能を果たすように、その内容の充実を図るとともに、トップページで多くの情報が得られるよう平成20年度にリニューアルした（写真7）。特に授業成果展示に関する案内や、展示内容を写真で紹介するフォトギャラリーを開設したほか、定期的に発行されるGPニュースレターや、SNSへのアクセス、GP図書リストを掲載した。

Webサイトと並行して、GPだよりというメールマガジンを、本事業の取組状況を迅速に伝えるツールとして月2回を目標に計23回発行した。平成20年度はその配信先を学部の全教員から全教職員へと拡大し、コラボ授業の進行状況や成果展示会の開催情報、学内大型モニターでの放映内容の告知、諮問委員会や他大学との交流等、各取組を随時報告した。また、前年度に引き続きA4両面のGPニュースレターを年4回発行した（写真8）。このニュースレターは、本事業の取組を学部関係者のみならず地域の人々に広く伝えることを目的として、紙面を構成した。具体的には、GP関連のイベント情報の案内や報告、コラボ授業や取組内容に関する報告、またGP図書の紹介を掲載し、学外・学内に広く配布した。

主にコラボ授業の学生・教職員そして連携先関係者との情報共有を目的としたSNS（通称「Guppy!」）は、20年度前期にシステムの試行・改良を終え、後期から本格運用を開始した。運用開始に先立って、学生向けの説明会と教員向けの講習会を開催し、SNSの利用方法を



写真8 GPニュースレター

学内に周知した。SNSの登録者数は、学生・教職員・管理者等を含め440名であり、コラボ授業用として32個のコミュニティを開設した。コミュニティは、授業内のコミュニケーションツールとして機能し、また一部はコンセント委員会の運営やSNSの利用相談にも活用した。

半年間の運用の結果として、コミュニティ全体でのトピックの書き込み数は95件、トピックに対するコメントの書き込み数は100件であり、コミュニティへの投稿は少数の授業に限定される傾向が見られた。一方、ページの総アクセス数は、約22,500ページ、月平均約3,700ページが閲覧されており、情報提供及び共有という面での利用は進んでいると考えられる。

これまでの運用では、教員がコラボ授業のコミュニティへ授業報告を書き込み、その内容に対して学生が意見や感想を書き込むという方式を採っているため、教員主導の面が強く、そのことが学生の投稿数の多少に影響していると思われる。そのため平成21年度からは、学生自らがトピックを立て意見や感想を投稿できるように運用方法を改善し、コミュニティへの投稿の自由度を高めることで利用者数・投稿数の増加を促したいと考える。

情報提供を目的としたもう一つの活動として、GP図書リストの作成がある。GP図書とは、平成19年度（56冊）及び平成20年度（8冊）に収集購入された可視化や地域連携に関する書籍である。これらの書籍を、より多くの学生や教職員が利用できるように、GP図書リスト（各頁に約2冊分を掲載し全33頁）を作成した。その作成にあたっては、書誌のみならず、各文献の表紙などの写真、目次、概要を掲載し、洋書については分かりやすいように和訳を付すことで、リストを通して文献に関心を抱かせることができるものを目指した（写真9）。12月下旬よりこのリストを閲覧用として学内2か所に設置するとともに、リストの一部を学内大型モニターやWebサイト、GPニューズレター等において広報した。これまでに、コラボ授業の学生や教員が利用するなど、

数は少ないが徐々に利用者が出てきている。

### 2.3 可視化のための環境整備

平成20年度は、「見る・触れるからの発想」教育方法の実現にむけて、前年度に引き続き、可視化のための環境整備を進めた。ここでいう可視化とは、授業風景や学生作品のみならず、模型や加工工程見本、様々な工具や道具等を、目に見え、手で触れることのできるものとするところである。その環境を整えるため、可視化や地域連携によって生じる知的財産権の問題に対処するガイドラインの作成をはじめ、携帯型展示台や加工見本のための展示棚や照明を整備した。

知的財産権の取扱い方法については平成19年度よりコンセント委員会において、識者を交えて検討を重ねていた。それを踏まえて、平成20年度には「知的財産権説明文書」（著作権ガイドライン）をまとめ、該当する授業の担当教員及び学生への周知のために使用した。同文書には、本事業で著作権が生ずる事例を挙げ、各事例への対応方法や成果物に関する権利内容を明文化した。また、事前の手続きや契約書の書式作成例等を含めた。

可視化のための環境整備の一環として、携帯型展示台を設計し制作した。その設計プロセスでは、①通常の作品のみならず授業プロセスまでを含む多様な成果物が展示できること、②作品として「個」の展示ではなく、授業として「群」の展示を可視化する展示スペースとなり得ること、そして③様々な場所で展示会を開催することが可能な携帯利便性を備えていること等が必要な条件として挙げられた。

完成した携帯型展示台の仕様は、天板の長さが1800mm、幅は900mm、天板面はリバーシブルで、オフホワイト色とグレー色になっており、展示内容に応じて選択できるようにした。この展示台は、天板を脚部に乗せて使用する手法をとり、脚部の使用方法により高さが3段階（使用時の高さが、920mm、820mm、350mm）に調節できる（写真10）。また、専用のキャリアー（1台につき5セット分の展示台が収納可能）で、運搬・移動が容易に行えるようにした（写真11）。シンプルな天板と脚部の構成による携帯型展示台は、様々な個性ある授業成果物に対応し、学内及び学外において機動力のある展示台として活用されることを期待している。

携帯型展示台や見本棚の制作設置に加えて、学内における展示照明設備の充実を図った。既存の照明は、主に卒業制作展等の大規模な展示企画が想定され、展示空間も限られているという問題があった。一方、本事業では各授業単位での展示を想定しているため、小規模展示にも対応できる照明の導入が必要となった。そこで学内7箇所に、照明ダクトレールを取り付け、調光可能なスポッ



写真9 GP 図書リスト

トライトを導入し、照明を備えた展示空間となるよう整備を行った（写真12）。

また、可視化のための環境整備の一環として、加工見本展示棚の制作を行った。これまでも芸術文化学部では、金工、木工、漆工、デザイン等の分野で、技術解説や発想を導くための見本を様々な形で可視化してきた。しかしこれら可視化された教材は、限られた場面で使用されるだけで、関係者以外の学生や教職員が日常的



写真10 3段階の高さに調整できる携帯型展示台



写真11 収納時の携帯型展示台



写真12 照明を備えた展示空間での展示風景



写真13 漆碗の見本展示棚

に共有することはなかった。そこで、平成20年度の本事業では、70種類に及ぶ漆碗の見本、螺鈿の見本手板50枚、変わり塗り見本手板50枚、金工のナイフ制作工程見本、木工の削り物制作工程見本、薄肉レリーフ制作工程見本を展示する棚を制作した。これらの見本棚は、学内を通行する多くの学生や教職員が、日常から目にするところのできる場所に設置した（写真13）。

#### 2.4 地域連携のための環境整備

平成20年度コンセント委員会では、地域からの具体的な要請や課題を受け取りコラボ授業に繋げる仕組みを検討し、地域と学部をつなぐルートの整備を進めた。

従来、地域からの要請窓口には、いわば、「公的窓口」と「私的（半公的）窓口」がある。「公的窓口」とは、大学の地域連携推進機構地域づくり・文化支援部門であり、ここに寄せられた地域からの要請は自動的に学部への公式な依頼として検討される。一方「私的窓口」とは各教職員のネットワークを介して地域から直接要請が寄せられる場合である。

「公的窓口」に寄せられる要請内容は、造形・デザイン的な制作依頼や、開発・企画・しくみづくりなどが主で、教員への依頼と学生への依頼に大別される。寄せられた依頼は、当該部門を運営する専任教員に報告され、同事務職員との合議により受託研究・事業に該当するか、それ以外の対応（例えば学生アルバイトとしての扱い、課外実習、ボランティア的協力など）となるかが判断され分類される。しかし、授業づくりのテーマという観点からは希薄である。また、要請内容の一覧を全教員に公表する措置が取られていないため、要請受託の是非判断が当該部門の少人数で決定され、適切な担当者を見極めるのが難しい状態にあるという問題が見受けられる。

「私的窓口」での要請は、当該教員がそのまま引き受ける（あるいは断る）場合と、当該教員によって別の教

員や「公的窓口」へ紹介される場合がある。しかし、紹介措置は比較的稀で、大概の場合は大学および学部の把握の外で教員個々の裁量によって処理されている。そのため、ここでも要請が全ての教員の共有情報とはならず、教員個々の学部（当該部門）への報告意識の希薄さが学部の把握を不完全にする悪循環を生み、かつ受託事業等、業績となりうる活動の機会を失うケースも起きかねないと考えられた。

また、当学部で行われるコラボ授業のテーマは、そのほとんどが教員個々のネットワークに依存するものであり、地域連携の経験が少ない教員にとっては、コラボ授業の新規起ち上げは連携テーマを見つけ出す作業の時点で難易度の高いものとなる傾向があった。

そこでコンセント委員会は、今年度の新たな取り組みのひとつとして、第2の「公的窓口」として地域要請収集の働きかけを行った。既設の「公的窓口」が、主として教員の受託研究・事業や共同研究を軸とした分類を行うのに対して、この窓口では主として授業づくりのシーズ収集を軸として要請を募るという違いがある（図3）。この働きかけはまず、「富山大学芸術文化学部への地位連携授業協力調査票」を作成し、これを高岡市や富山市の都市経営課に投げかけ、その他各部署に集積している地域要請の集約を依頼した。結果14件の要請が返答され、このリストを当学部教授会において全教員に提示し、新規コラボ授業の取り組みを促した。

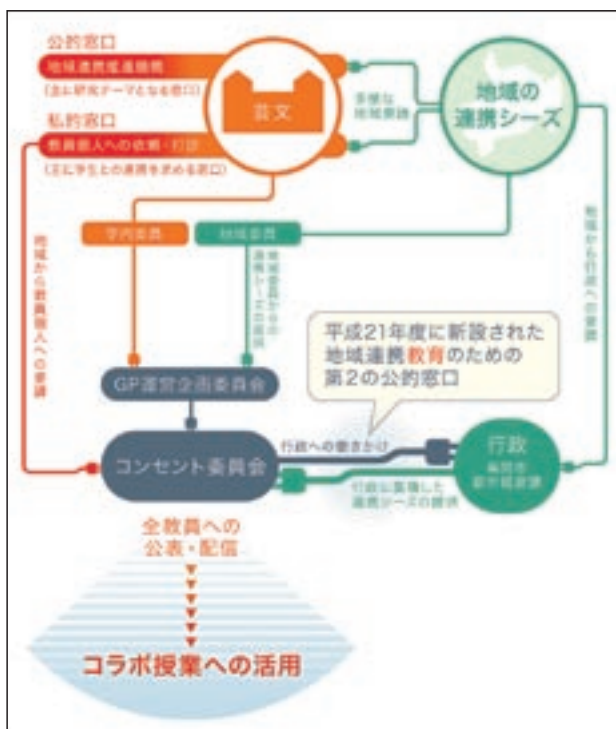


図3 GP連携テーマ収集ルート（仕組み）の概念図

## 2.5 調査と交流

本事業では、前年度に引き続き「見て触れて分かる」ために工夫された国内の様々な展示事例の調査と可視化資料の収集を行った。また、他大学における大学教育改革プロジェクトの情報収集を行うとともに、本事業の取組の成果を他大学や学会等へ報告した。

7月には、コラボ授業の1つ「プロジェクトゼミ」科目について、大学教育学会第30回大会（目白大学）で口頭発表を行った<sup>2)</sup>。この発表は本事業の報告という側面のみならず、初年次導入教育の実施事例を報告するという目的があった、同科目は、芸術文化学部の初年次導入教育の中心となる「導入ゼミ」の一つであり、本事業で提唱する連鎖型成長ステップでは「出会い」の段階に位置づけられる。実際のコラボ内容は、地域の会社、団体、商店、NPO、個人、行政等が抱える実際の問題に対して、履修学生がチームでその解決に取り組むというものである。学会発表では、他大学のGP事業に携わっている教員より、事業終了後の予算措置についての質問を、また、共通テキストとして作成した「教材資料集」の使い方や公表についての質問を受けた。

8月には、京都精華大学の教職員6名が本事業の取組を視察に来学し、コンセント委員会メンバーの教員5名と情報交換を行った（写真14）。京都精華大学とこのような交流の発端は、前年度に行われた可視化調査の一つである。京都精華大学は、京都の伝統工芸の現場と協力して学生を実践的に教育する特色GP事業を進めており、地域活性化という点で本事業と共通項が多い。情報交換を通して、特に、取組の具体的成果の検証やGP事業終了後にどのように活動を継続していくのかということに関して問題意識の共有ができた。

平成20年度の可視化調査は、首都圏において計4件行われた（5月・11月／渡邊、8月／沖、3月／福本）。「東京ミッドタウンにおける展示計画と実施の実地調査」（平成20年8月中旬～9月1日）では、環境問題とアー



写真14 京都精華大学関係者との交流



トを融合したプロジェクトへの学生を交えた制作と設営協力を通して、全国規模のアート・プロジェクトの運用と、大都市会場における展示設営の計画とその段取りを調査した(写真15)。特に設営に関しては、芸術文化学部学生有志15名が同行し、東京会場での夜間設営作業に参加、身をもってその実地調査を行った。当該企画は「デニムの耳プロジェクト」と呼ばれ、年間地球約2周分になるデニム生地の廃材をアートやクラフト製品に再利用する環境アート・プロジェクトであり、日本有数の大型商業施設「東京ミッドタウン」で行われる国際ファッションイベント「ジャパン・ファッション・ウィーク in トーキョー」の企画デモンストレーションとして計画されたものである。今回は少予算の大規模プロジェクトという特異性があったが、この場合、事前の計画性とその計画に固執しすぎない柔軟性、またマンパワーの確保に関して多方面へのネットワークの広さがプロジェクト成功の鍵になるというポイントを実感することができた。

「教育・福祉施設及び美術館における可視化調査」(平成20年3月23、24日)では、東京にて3か所の施設を可視化、学習環境という視点から調査を行った。アド・ミュージアム東京では、常設展、企画展、及び附属図書館にて展示方法の調査及び文献整理の手法に関する調査及び関係資料の収集を行い、様々なメディアによるインタラクティブな展示方法の可能性を知る機会となった。東京大学教養学部附属教養教育開発機構開発部門駒場アクティブラーニングスタジオでは、学習環境のデザインという視点から、担当教員より進行中の現代GPの取組に関する説明を受けると共に、資料及び意見の交換を行うことができた。また、体育施設の環境デザインという視点から、BumB東京スポーツ文化館の見学を行った。

1月には、大学における大学教育改革プロジェクトの取組状況についての調査をするため、「大学教育改革プログラム合同フォーラム」(主催：文部科学省、財団法人文教協会、会場：パシフィコ横浜)に参加した。同



写真15 「デニムの耳プロジェクト」

フォーラムは、「質の高い大学教育推進プログラム」や「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」など、13プログラムに選定された取組について発表報告する目的で開催されたものである。コンセント委員会委員1名が参加し、平成19年度に選定された教育機関から、これまでの実施状況ならびに今後の計画等についての報告を聴講した。また、同時開催のポスターセッションでは、芸術文化学部の教育・研究活動に関連すると思われる他大学の取り組みを中心に情報収集を行った。

### 3. おわりにー平成21年度の活動にむけて

平成20年度は、本事業の中心的年度としてコラボレーション授業を推進し、成果の具体化・可視化を工夫することで、学生が様々な地域資源に出会い地域への関心を高め、豊かな発想力を身につける活動を展開した。具体的には53件のコラボ授業と22件の展示等による成果発表などの成果を上げた。

本事業の最終年度である平成21年度は、これまでの活動を踏まえ、特に地域企業や住民、行政からのニーズを取り入れた具体的な連携授業を主体として、「出会い・試し・気づき・つなぐ」成長ステップの後半部分に重点を置いた事業を展開する。このことにより、全体的な成果として学生が自らの経験を専門分野に生かすとともに、地域に還元する授業連鎖の仕組みを完成させることを目指す。

特に平成21年度には、芸術文化学部「Tsumamaホール」(富山大学高岡キャンパス内)のほかに地域3~5ヶ所を展示会場とする「コンセント&プラグ展」(仮称)を開催し、授業の成果展示や発表を地域全体に広く実施することで、授業参加学生や連携先のみならず、授業に参加していない学生や教職員、地域企業や一般市民の関心を高め、大学と地域が一体となった活動へと発展させる。そのため、コンセント委員会は、引き続き地域や教員、学生からの様々なニーズと授業とのマッチング、効果的な授業支援を推進するとともに、本事業が修了した後もこの教育システムを継続発展できる道筋を作る仕組みを検討する。

本事業の最終年度の後、これまで培ってきた地域と教育をつなぐ仕組みが雲散霧消することのないように、コンセント委員会がその役割を終えた後も地域連携授業に資する連携テーマ収集ルートとその運用の仕組みは何らかの形で継続していくことが望ましい。それが最終年度に残された課題のひとつといえる。また、大型モニターを始め、本事業に関連して購入された機材や収集された情報についても、本事業終了後も十分に活用されるシステムを準備構築することが最終年度における課題である。

## 謝辞

芸術文化学部の現代GP事業は、教職員の皆様のご協力を得て平成20年度の事業を終えることができました。「出会い・試し・気づき・つなぐ成長ステップ」に授業として参加していただいた数は53科目で、42名の教員の皆様に参加して頂きました。その中で、学外実習・見学先71箇所、そして講評会、講演等の招聘講師人数は50名を数え、多くの出会いの場を学生に提供することができました。また、演習・実習科目は35科目が行われ、様々な試し授業が実施されました。本現代GP事業に対する教職員の皆様のご理解とご協力に深く感謝いたします。

## 註釈

- \* 1 芸術文化学部の教育目標は、「芸術文化に対する感性と幅広い分野の知識・技術を活用し人間と自然や社会との関わりの中で問題を発見し、解決しようとする意欲的な人材の育成」と「地域の幅広い伝統資源を継承し一層発展させることのできる人材の育成」である。
- \* 2 各委員会の役割については前年度報告<sup>1)</sup>を参照。

## 参考文献

- 1) 小松研治・小松裕子・渡邊雅志・内藤裕孝・福本まあや・沖和宏・米川覚・近藤潔・前田一樹・小堀孝之・東田真由美・畠山美紀、「現代GP「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育」—平成19年度の活動報告と今後に向けて—」、富山大学芸術文化学部紀要第3巻、2009: 148-157.
- 2) 近藤潔・小松裕子・澤聡美・立浪勝・渡邊康洋・小林和子・深谷公宣・山田眞一・米川覚・安達博文・島添貴美子・辻合秀一・内藤裕孝・長岡大樹・西島治樹、「問題解決能力の育成をめざす初年次導入教育—プロジェクトゼミの企画から実施まで—」、第30回大学教育学会大会、2008: 88-89.

文末資料 平成20年度全コラボ授業一覧

学年	授業名	学期	連続型成長ステップでのポジション				実施形態	担当教員数(専任)	履修学生数	連携協力講師・講師者		学外実習・見学	
			出会い	試し	気づき	つながり				総人数(団体は組数で勘定)	経費支援措置数	総件数	経費支援措置数
1年次	ライフスタイル	前期	●				講義	1	79	1	1	1	1
	文化と観光(集中講義・非常勤)	前期	●				講義		37	5	3	5	3
	工芸制作入門	前期		●			演習	2	53	1	1	1	1
	プロジェクトゼミ	後期	●				実技	14	121	21	1	20	0
	コンピュータによるデザイン入門	後期	●				演習	1	41	1			
	人と木のある暮らし	後期	●				講義	1	59	1	1		
	マーケティング	後期	●				講義	1	78	1	1		
	木工基礎演習	後期	●				演習	2	40	1			
2年次	シンボルデザイン演習	後期		●			演習	2	44			1	
	プロダクトデザイン	前期	●				演習	2	31	1		2	2
	観光実習	前期	●				講義	1	30	1	1		
	メディアアート基礎	前期	●				演習	1	59	1	1		
	漆塗地制作	前期		●			実習	2	15	1	1		
	木工具演習	前期		●			演習	1	11	2	2		
	水泳水中運動	前期		●			演習	1	17	1	1	1	1
	コンピュータによるデザイン演習	前期		●			演習	1	39	3			
	デザインプレゼンテーション	前期		●			演習	3	50			1	
	ジュエリー制作	前期		●			実習	1	9	1		1	
	アートマネジメント概論	前期		●			講義	1	35	1	1		
	空間デザインⅡ	前期			●		実習	2	14	2	2	2	2
	まちづくり	前期				●	演習	1	19			1	1
	造形工学基礎実習	後期	●				実習	4	5	1		1	
	高齢化社会の保健文化	後期	●				講義	1	24	1	1		
	現代美術概論	後期	●				講義	1	73	1	1		
	西洋演劇の歴史	後期	●				講義	1	31	1	1		
	ポランディアの世界	後期	●				講義	2	18	5		1	1
	美術の楽しみ(形で表現する)	後期		●			演習	2	24	3	3	2	2
	インタラクティブアート 基礎演習	後期		●			演習	1	10	1	1		
コース実習課程	後期		●			実習	3	14	3	1	4	4	
クラフトデザイン	後期			●		演習	1	11	11				
生活用具制作	後期			●		演習	3	26					
環境造形A(塑造)	後期			●		演習	2	10	1	1	1		
インフォメーションデザイン演習	後期			●		演習	1	32	1	1			
ビジュアルコミュニケーション演習A	後期			●		演習	2	13	1				
3年次	地域産業概論	前期	●				講義	1	10	3	1	1	1
	美術科教育法Ⅱ	前期	●				教職	1	21			4	4
	新制実習Ⅰ	前期	●				実習	1	1	1		1	
	インタラクティブアートプログラミング応用	前期	●				演習	1	6	1	1	1	
	絵画Ⅱ	前期	●				実習	1	18	1		1	
	新制実習A	前期		●			実習	1	7	1	1	1	
	都市計画と文化	前期			●		講義	1	35	1	1		
	インタラクティブアート 応用演習	前期			●		演習	1	19	1	1		
	地球と文化事業マネジメント	前期			●		講義	1	16	1	1		
	木工精造実習	前期			●		実習	2	21	1	1	2	2
	成形合板演習	前期				●	演習	2	6				
	ビジュアルコミュニケーション演習B	前期				●	演習	1	40	1			
	総合演習	前期				●	教職	3	21	3	3	1	1
	環境造形C(金属)	後期	●				実習	1	6			1	
	広告デザイン演習	後期			●		演習	1	29	6		6	
	プロデュースシステム	後期				●	講義	1	44	2	2	2	2
	芸術の社会学	後期				●	講義	1	47	2	2	2	2
	サインデザイン演習	後期				●	演習	1	30	1	1	3	3
	空間デザイン(インテリア)	後期				●	演習	1	15	3	3		

H20年度コラボ授業数	学期	各成長ステップ数				実施形態	担当教員数(専任)	履修学生数	連携協力講師・講師者		学外実習・見学		
		出会い	試し	気づき	つながり				総人数(団体は組数で勘定)	経費支援措置数	総件数	経費支援措置数	
総数	53	総数	21	13	11	8	のべ総数	88	1564	105	44	71	33
前期	28	前期	11	8	5	4	前期	37	719	38	23	27	19
後期	25	後期	10	5	6	4	後期	51	845	69	21	44	14
							重複を除く数	42					